

2021年  
(令和3年)  
11月11日

むつび

290号

石井十次の会 会報

## 文教の町高鍋と石井十次の生き方

宮崎市 津野 勝己

はじめに

児湯郡に生まれ育った祖母は、我々孫を集めてよく、高鍋の話をしてくれた。その話の中には、必ずと言っていいほど、明倫の教え（明倫堂学規）や秋月の殿様の話、そして高鍋で生まれた先覚者のことが出てきた。残念ながら話の内容がどのようなものであったか、思い出すことはできないが、話の終わりに、「高鍋で学者ぶるなどと言われるほど、偉い方々がたくさん出ておられる。お前たちも、しっかり勉強して立派な人になりなさい。」と、諭されていたのは憶えている。

明治25年に生まれ、養女として育てられた祖母は、十分な教育が受けられず、淋しい思いをしたとのことである。もしかすると、自分の果たせなかった夢を、子や孫に託していたのかもしれない。

今回、「むつび」の原稿執筆にあたり、祖母の話を思い出しながら、高鍋の歴史と十次の生き方について調べてみることにした。

なお、児嶋草次郎著をはじめとする諸文献、むつび掲載の「石井十次を支えた先人たち」との重複する部分はご了承願いたい。

### 1 十次の幼少期・青年期を支えた明倫の教え

幼少期・青年期の十次の言動をたどっていくと、少なからず明倫の教えが影響しているようである。十次は、6歳で明倫堂に入り、その後、明倫堂の後身である島田学校、私塾晩翠学舎で学んでいる。

十次のエピソードとして語り継がれる「縄の帯」の話は、あまりにも有名である。自分のものを差し出して、他人を助ける慈善の心は、すでにこの頃から芽生えていたと言える。この他人を慈しむ心は、両親の影響はもとより、明倫の教えが幼少の十次にしっかりと根付いていたことを物語っている。

また十次は、17歳の時には、日常生活を律し、自らを育てていくための、「自戒」「自規」を記している。その中には、「奢る気持ちに謙遜心で克つべし」等、自戒の項目が15条、「毎日曜日にはその週の計画を立て、自分の思いと言行が一致するようにしろ」等の自規の項目が16条にわたって書かれている。今で言うと、高校2年生の成人前の若者である。十次の思いの強さ、志の崇高さが伺える条文である。この「自戒」「自規」が作られた背景には、日常生活の指導目標として示された明倫堂学規が影響していると言われている。いかに高鍋の道德教育が優れたものであったかが伺える条文である。

## 2 種茂の施策と十次の生き方

高鍋藩7代藩主、秋月種茂は、斬新な発想と周到な計画で優れた政策をとり、高鍋藩の最盛期をもたらした人物である。その種茂が最も力を注いだのが人材育成である。家臣の千手八太郎の進言もあり、1778年に明倫堂を創設し、武士に限らず民百姓にも教育への門戸を開いた。また、窮乏のため、全国で頻繁に間引きが行われていた頃、間引きを禁止し、3人目の子供からは1日につき米2合もしくは麦3合を支給する農民多子救済制度を定めた名君である。

十次が新島襄の「同志社大学設立趣意書」を読み、教育の必要性を痛感し、馬場原朝晩学校を設立したことや、孤児救済という崇高な目標を掲げ、それを実現し「児童福祉の父」と呼ばれるようになった背景には、高鍋の歴史や文化、風土と言ったものが影響しているのであろう。

## 3 祖母の話と十次に関係した先人（柿原正一）の功績

ものの考え方や人への接し方、生活習慣など、人格形成の多くを祖母から学んだ。次男である私は、長男との待遇の違いで腹を立てたことが何度もあった。そのたびに、「お前は次男だから…」の一言で納得せざるを得ないこともあった。

「朝は早く起きて庭掃除をきなさい。」「食べ物を粗末にするものではない。」「敷居を踏むな。」「身なりは整えておきなさい。」そんなことを我々兄弟は、毎日のように言われていた。やがて成人し、祖母が言っていたことが明倫堂学規に基づくものであることを知り、少し、誇らしい気持ちになったことを憶えている。

祖母の話した中で思い出したことがある。それは「カキバル」さんの話である。

「今の赤禿（現新富町湯風呂）があるのはカキバルさんのお陰よ。だから、赤禿の人たちは、今でもカキバルさんのことを神様のように尊敬しておるとよ。」そんな話を何度か聞いた。幼心にカキバルさんは偉い方で、地域に貢献した人だろうという思いはあった。そしてつい最近、「むつび」掲載の「石井十次を支えた先人たち（5）」を読み、あの方が、祖母が言っていたカキバルさんかと、はっとさせられた。

祖母が言っていたのは柿原正一のことである。正一は、無人の荒野であった赤禿（湯風呂）に私財を投じ、愛媛県からの移民数人とともに開拓し、豊かに実る赤禿（湯風呂地区）を作り上げられた方である。

むつびには、十次と相談して、開拓の一員として孤児院出身者4名も入れたとある。勝手な想像だが、開拓の様子を祖母は誰からか聞いて、詳しく知っていたかも知れない。そして我々孫に語っていたかもしれない。思い出せないのが残念だ。

祖父が四国出身で、新富町の赤禿の近隣の地区に居を構えたこともあり、祖母にとって柿原正一は身近に思える偉人だったのである。

おわりに

今回のむつび原稿執筆にあたり、改めて「文教の町高鍋」と言われる所以を知ることができた。また、十次をはじめとする先人たちの志の崇さ、意志の強さに圧倒された思いである。

コロナ禍、環境問題、外交上の問題等、先行き不透明な時代である。そしてまた、SNS上ではホームレスを揶揄したり、人の命を序列したりするような発信が横行しているとも聞く。世の中が間違った方向に向かわないよう、今一度、先人たちの思いをしっかり受け継ぎ、新しい未来を切り開いていかなければならない。

# 石井十次と都城支部歴

石井十次の会 都城支部 支部長 持永 ナミ子

## 1 十次 明治 35 年我が郷土都城を訪れる

明治期に 3,000 人の孤児を救った石井十次。

その十次一行が我が郷土・都城を明治 35 年 7 月に訪れています。九州一円を廻って国分から都城に入り、都城上町の劇場にて軍歌、踊り、幻灯など慈善音楽会を開いています。そのために地元の発起者、賛成者 39 名と都城通信者、北諸県郡青年会も協力。700 人余りの来館者がありました。また、女性の方々も慈善菓子を発売し、お菓子の売上を含めた 162 円 98 銭の寄付が集まりました。当時の米が 10 kg で 1 円 19 銭の時代でした。

発起者、賛成者に対し「都城の名と共に一同の永く忘れ得ざる所なり」との記録(1902 年 9 月 10 日岡山孤児院新報第 71 号)があります。今から 119 年前に都城の地を選ばれたのが驚きと感謝です。

また都城の住民のおもてなしに素晴らしい言葉を残してくださっています。

## 2 映画完成を機会として都城支部が発足

今から 17 年前、映画「石井のお父さんありがとう」が完成しました。孤児救済に尽力し、社会福祉事業の先駆者としての石井十次の生涯を描いた映画です。

ロケは日南より開始され、主役に松平健・竹下景子など名優等が出演。宮崎県を始め東京・岡山・和歌山・倉敷など各都道府県で上映されています。宮崎県人の情や愛の深さ、また心の広さに共鳴した人々がいらっしゃることと思います。そして、教育のための教材として位置づけされたよい映画だと思います。

「石井十次の会支部」をと声を上げた方が「石井のお父さんありがとう」の映画に携わった人達でした。

そして平成 19 年に「石井十次の会都城支部」を発足しました。そのときは、石井十次記念友愛社理事長・児嶋草次郎様より「石井十次の心に学ぶ」について記念講演を頂きました。

また、パネルディスカッションでは 6 名で意見交換を行いました。登壇者として助産師さん、そして行政より市の子供課長、6 児の父親と個性豊かなメンバーとなりました。

## 3 都城支部の近況報告

私たち都城支部の会員は現在市内に設置されている石井記念有隣園の年間スケジュールの中で年 2 回、子供達との交流会を実施しております。

また、地域住民の方へ都城支部の会報として「なわのおび」を刊行しております。この「なわのおび」の特色は十次の思想を広めるために市民の寄付を募ることや 80 字メッセージをいただくことです。おかげさまで 10 年間に 300 名以上の方に参加して頂きました。年 2 回、各回 3000 部の発行で地元都城をはじめ県内そして全国へと配信してきました。

そういう中ではありますが、諸事情にて今秋からしばしお休みさせていただきます。総括担当の本郷貞雄さん・委員会の方々、本当にご苦労様でした。

この他には、「みやこんじょ十次塾」を令和 3 年より立ちあげました。この塾は、本郷貞雄氏・石原潤二郎氏を中心に「石井十次物語」をベースに輪読学習会形式で進めています。集まり語り合う機会としてランチを食べながら学生気分でもこれからも楽しく続けていこうと考えております。

## 《 お し ら せ 》

### ★新会員のご紹介

【木城町】岩爪 優子 久保 富士子

【日向市】古志野 美恵子

【宮崎市】玉利 カヨ子

【西都市】小田切 美智子

### ★ご寄付をいただきました (敬称略)

(一般)

【都城市】藤田 秀夫

【木城町】永田 克巳

【横浜市】浦 初恵 富岡 光子

(奨学金基金へ)

【小林市】神之菌 司

### ★9/21～10/20の資料館来館者

団体・グループ 33人

個人 20人

計53人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により10月20日までのものとしています。

### ★12月号の通信発送作業

12月 9日(木) 9時から

10日(金) 9時から

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木

644-1

後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

[yuuaisya-jyuujinokai@ki-jo.jp](mailto:yuuaisya-jyuujinokai@ki-jo.jp)

新型コロナウイルス感染が拡大した2020年度、全国の国公私立の小中学校で30日以上欠席した不登校の児童生徒は19万6127人と文部科学省の調査で判明したと新聞は報じています。

このことは、一斉休校などで生活のリズムの乱れ、外出、友達との交流不足も原因として考えられますが、友愛園では、指導員・保母等、職員の対処が良く、平常どおりの毎日の生活を送っている様です。

恒例の秋の収穫感謝祭、園児と共に来客を歓待され、賑やかな一日を楽しく過ごす時間がありましたが、周知のとおり、コロナウイルスの感染の防止上、止むなく、昨年につき中止となっています。

本来なら園児たちが農作業で収穫した農産物の提供、友愛園、各保育園児の一大イベントとして催され、来園者にご披露する演技が出来ないことは、残念に思います。



元気に下校する友愛園の児童たち  
※編集後記

巻頭は津野勝己氏の玉稿です。感謝します。

最近、コロナウイルス対策の「マスク」をされている人が商店を除いて少なくなっている様です。大丈夫ですかねえ。早く遠出したいですね。

文責 生駒亮